

冒険としての読書

後藤 総一郎*



第62回私立大学図書館協会総会（2001年8月7日）の記念講演の記録です。
『私立大学図書館協会会報』117（2002年1月）より転載。（編集部）

*ごとう・そういちろう／政治経済学部教授／日本政治思想史

こんにちは。ご紹介いただきました後藤でございます。

夏休みに入ったばかりの、少し図書館の皆さんもゆっくりできるかなという時期に、また不順な天候の季節にもかかわらず、こうして全国からたくさんの皆さんにお集まりいただいて、「図書館のあすを考える」ということで学び合うことに対して、心から敬意を表したいと思います。

それというのも、実は、私の略歴にも書かれておりますように、つい2年前まで3年間ほど本学の図書館の館長職を務めてまいりました。そんな経験からも、皆さんの勉強の様子がよく理解されます。

思えば、全国図書館大会あるいは私大協のこうした大会にも何回か出席させていただいて、たくさんの方を勉強させていただいたということ、いまあらためて思い出しております。そんなこともあって、何か読書についてお話をいただきたいという本学図書館の大野図書館庶務課長の申し出もあって、お受けをした次第でございます。

そうはいっても、私はさしたる読書家でも、またよきライブラリアンでもございません。ただ、還暦を過ぎた60余年にわたる私の人生のなかで、その時その時の一冊一冊の本が、どれだけ私の心を、また歩むべき道を教えてくれたか。さらには、そこから人間とは何か、あるいは日本人とは何か、ということを教え続けられてきたかしれません。そのことは、きょうお集まりの皆さんも同様だろうと思います。まさに「学問とは読書なり」といってもいいかもしれません。

そうした実感もあって、実は図書館長に就任したときに、私は図書館のあるべき運営について「知の循環体系」ということばを提言し、それを具体的に館員の皆さんとともに一緒に推進してきた経験がたしかにあります。

「知の循環体系」とはどういうことかといいますと、第一は、いい本を選書し、収集し、迅速にサービスをする、ということであったかと思います。あたりまえのことではありますけれども、当時、明治大学の予算は年間6億5,000万円ぐらいでした。毎年外書のレートが上がって、教務理事としよつちゅう喧嘩をして「もう少し上げろ」ということをいつてきたりした経験がありますが、いま7億を少し超えたところの予算であるそうで、明治大学の理事会は図書館の基本財産を認めてくれるという意味では、あ

りがたいというふうに思ってきました。

ところが、選書し、収集し、閲覧サービスに供することであつたのですが、5、6年前に図書館長に就任したときには、新しい本や古い本あるいは外書が堆く書架に詰まっていて、一番古いものが3年、新しくても1年間くらいが滞貨をしておりました。こんなことでは困るということで、いろいろな先生から、新刊本はせめて2、3か月で出せというような要求もあつたりして、学長スタッフ研修をやったときに、学長や教務理事から叱られたことがありました。さっそく事務部長に電話をして、この滞貨を何とかしようではないかということ話をしたりして、その後、外からの協力を得たりして、いまはわずか2、3か月で閲覧に供するということもしておろうかと思います。いい本を選び、収集をし、迅速にサービスをするということが、まずは図書館の基本ではなかろうかということ、館員の皆さんと話し合い、そしてそれを実践してきたという記憶がございます。

第二は、いい本をたくさん収集をして、それを学生に、教職員に、あるいは市民やOBの皆さんに、書庫ではなくて、できるだけ開架をして、手にとって本が読めるようにすることができないかということを提言しました。当時、開架率は中央図書館が9%、和泉キャンパス、生田キャンパスが、それぞれ30%ぐらいだったかと思います。それを、貴重図書は除いてほとんど開架しよう。そして、検索で見めるのではなくて、書庫に入って、手にとって書物を開いて、それを貸し出して読む、というふうにすることが大事だろう。とはいっても、開架をすると本がなくなったり、乱雑になったりということで、だいたい館員の皆さんから苦情を言われました。特に管理職からは、しょっちゅう文句を言われました。しかし、この金は学生からもらった授業料でやっている。そして、たくさんのいい本を学生諸君に読んでもらい、教職員に読んでもらって、いい成果をあげていくことが、図書館の仕事だろうということで、大振る舞いをして、現在はほとんど開架システムをとって学生諸君に喜んでいただいているということがあろうかと思います。

第三は、そうして本を読んだり研究をしたりしたその成果を、これは図書館の職員も含めてですが、発表する機会が必要だろう。館員の皆さんの力を発揮することも大事だし、また、図書館に眠っているさまざまな宝物

を研究したり発表したりして、紀要として多くの大学の職員や学生に見ていただくということで、年に1回ではございますけれども『図書の譜』という冊子を発行して、今日4号か5号が出ているかと思います。

もう一つは、明治大学の出版部というのが1955、6年までありましたけれども、その後断ち切れて、今日、明治大学には出版部がございません。大変残念なことであり、嘆かわしいことであるということもあって、図書館から立ち上げて出版部をつくらうという勉強会をして、いま理事会にもそれを上げて、細々ではあるかもしれませんが、出版部を再興しようということをしております。出版部をつくることによって、図書館で読んだ、あるいは研究をした成果が、本として今度は外の人たちに、多くの人に伝達をされていく。これも図書館の仕事として大切ではなかろうかということを経営として進め、今日に至っているかと思います。

実は、研究をし情報を理解するために、単なる職員や図書委員の皆さんとの勉強会や研究会だけではなくて、図書館の皆さんや図書委員の皆さんを含めて年2回、図書館の研修合宿を理事会にお願いをして予算をいただいてやってきました。その研修合宿のなかで、それぞれの皆さんが収書や整理あるいは閲覧などについてレポートをしていただいて、それを私が政策としてまとめ、そして予算化をし、図書館の実務として進めるという仕事をずっと進めてきたという印象があります。

さらに、昨年から山手線内のコンソーシアムというのを立ち上げて、お互いの大学に欠けている本を共通利用しよう、交換利用しようということで、その実現をスタートしたそうですけれども、これも当時数年前、立教大学の館長さんや係の課長さんたちが熱心に進めていただいて、実現にこぎ着けたということも、図書館の新しい生き方として、私はあったのではないかと思ったりしております。

そんな経験のなかから、きょうテーマとして掲げました「冒険としての読書」ということについて、私のささやかな読書体験から、本を読むことが、いかに私の心を開いてきたかということ。そして、心を開くための本の読み方というのはどうあるべきかということについて、ささやかなお話を申し上げて、皆さんにおみやげに持っていったいて酒の肴にいただければいいかなと思って、きょう壇上に上がらせていただきます。

した。

1 二人の思想史家に学ぶ

私の専門は、日本政治思想史という科目です。日本政治思想史というのは、多くの大学にはありません。たいへん地味な、しかしたいへん貴重な学問であるということはいえるかと思います。そのためには、日本はもちろんヨーロッパの書籍も含めてたくさんの書籍、つまり雑学をしななければいかんということがあって、日本の政治思想史を戦後新たに開講した、亡くなられた東京大学の丸山真男先生は、お弟子さんに来る若い大学院の研究学徒に向かって「思想史だけはやめたほうがいい。就職口がない。一番銭がかかる」ということをよく言われたそうです。そんなことを私の恩師である橋川文三先生に聞かされたりしながら、しかし好きでこの道に入って40何年かになります、その橋川先生の恩師が、実は丸山真男先生であったわけです。

丸山真男の日本政治思想史という学問は、一言でいえば「書かれた思想史」である。文字で書かれた思想史であるというふうに、私は理解をしてきました。つまり、例えば近代日本の政治思想史という学問を進めるには、明治維新以降の政治家や思想家あるいは知識人などの書物、政策、あるいは伝記などを克明に読みながら、その時代時代の政策や思想、それは体制の思想であったり、反体制の思想であったり、あるいは批評の思想であったりということがありますが、そういった「書かれた思想史」というのが思想史の対象になろうかと思います。

さらにことばをかえていえば、文字で書かれた思想というのは、これを書いた人は文字を持った知識人であったわけです。知識人の書かれた文字を通して書いた書物を分析しながら、その時代時代、その人々の、いわば精神や思想をさぐっていく。それが当時の光であったか、あるいはマイナスであったかという点検をしていくのが、思想史家の仕事であるかと思います。

ご年配の皆さんはご存じかと思いますが、戦後の1946年に『世界』という雑誌が岩波から創刊されます。その雑誌に丸山真男は「超国家主義の

論理と心理」というテーマでの原稿を書きました。爆発的な人気を呼んでたくさんの人に食るように読まれたそうです。自らも戦争体験としてくぐってきたあのファシズムの歴史を分析しながら、結局は、日本人というのは国家とか軍人という前にすべて括弧付の「天皇」に忠勤を尽くす。そして、その天皇の命に従って戦争を進めていくという、いわば天皇制ファシズムの思想そのものが日本の満州事変以降の15年戦争へ、そして第2次世界大戦へとコマを進めていったのであったという。このファシズムの分析は実に見事でした。今日も生きております。これは小泉内閣総理大臣もぜひ読んでいただきたいと思いますけれども。そのファシズムの分析をした論考を、丸山さんのお弟子さんであった立教大学の先生を長いことされておりました神島二郎先生は、大学を出たあと国会図書館に務め、片や成城の柳田国男の研究所に10年ほど通いながら柳田の民俗の研究を進めていった、その神島二郎先生が柳田国男にこの論考を見せたところが、柳田は「なかなか立派である。しかし、証拠がない。頭で書かれた観念の分析である」というふうにいったそうです。これはまさに証拠がなく神話として今日まで伝えられておりますけれども、そのことを神島先生や一高で同級生だった戦中派の世代である橋川文三先生にしばしば私は大学院時代に聞いた記憶があります。

そこから、神島二郎も橋川文三も、丸山学「書かれた思想史」だけでは日本の思想史や精神史の分析はできないということから、柳田国男が切り開いた「民俗の歴史」に手を染めていったわけです。

60年安保以後に岩波書店から出された『近代日本の精神構造』という名著は、神島二郎のまさに力作であり労作でありましたけれども、この後書きに神島先生は「私の学問は丸山学と柳田学を架橋した学問なのだ」というふうに書いて、多くの人に知られていったわけですが、まさにそうであったかと思います。

その神島、橋川両先生の文章や学問の仕方を学びながら、教えられながら、実は私も柳田国男の学問にひかれていったという遠い日の印象があるわけです。もう何回か幾つかの雑誌や本にも書いたことがあります、
「おまえはかつて左翼で全学連で旗を振っておったのに、どうして60年安保以後に右翼の柳田国男の研究に行ったのか」ということで同僚たちに

しばしば詰問されたことがありました。そのときに書いたりいったりしたことは、60年安保が終わったあと、橋川文三先生のところで、筑摩の記録「日本の百年」という本を出しておりましたが、そのお手伝いにずっと通っておりました。暮れか正月でしたか、あの時分まだ貧しい時代でしたが、ウィスキーの白というのを先生が買ってきて飲ませてくれたのですが、酔っぱらっていくうちに、「おまえたちの学生運動は失敗した。それはなぜか。マルクス、レーニンを読んで、プロレタリアートということばで、聖なるものとして日本の労働者、農民をとらえて、本当の意味での労働者、農民の精神史を知っておらん。だから啓蒙主義で上っ面で、民衆の心を掴めなかったから負けたんだ。家へ帰って、柳田国男が昭和16年に東京帝国大学で講演をした記録集である『日本の祭』を読め」といって渡されたんです。日本の祭、村の祭、これが日本のファシズムの温床ではないかと丸山さんもいっていましたが、祭の本を読むなんというのは、実にうさんくさいと思って遠ざけつつ、少しずつ読みはじめていった暗い日の印象を私は原点にしております。

たしかに祭というものは、村の尊い構成部分であり、バイブルなき我が日本国民の、民衆の精神史のもとをつくっていたということはよくわかるわけです。そこから、民衆の精神というものを、歴史というものを明らかにし、自分で身につけていくためには、支配者の精神史、思想史だけではなくて、文字なき民の民衆の歴史を、柳田が残していった民俗の著作を手掛かりにしながら読み解いていく。そして、丸山学と柳田学をクロスしていく。そのことが一つは大切ではないか。トータルに日本人の精神史を見ていく。そして、政治のプラスとマイナス、あるいは民衆のプラスとマイナスを見ていく仕事、これが日本政治思想史の私たちの世代における仕事ではなかろうかというふうに、自分にいいかせて何年か過ごしてきたという記憶がございます。

その柳田国男の「民俗史」というのは、丸山さんが「書かれた思想史」を対象とすれば、柳田国男の歴史対象としたのは「文字なき民の伝承記録」を歴史資料として、そして民俗史を書き上げてきた、つくり上げてきたということがいえるかと思います。

民俗学の話をするるとたいへん長いわけですが、例えば、『日本の祭』に

も出てきますが、一つは、目に見える資料。いまひとつは、耳で聞こえる資料。いまひとつは、心に映る資料。この3分類を柳田国男は伝承資料の資料として、そこから吸い上げて日本人の精神史を明らかにしようとしていったわけです。

目に見える有形資料というのは、例えば年中行事あるいは冠婚葬祭というものがあります。正月に門松を立てる。そして鏡餅を神棚に供える。それを分かち与えて食べ合う。この儀礼は何を意味するのか。『食物と心臓』という著書のなかに、餅はなぜ丸いかとか、なぜ正月に門松を飾るのか、ということを書いております。遠い昔から日本では、神は山から下りて門松を依代として伝わってその家々に訪れるとされている。そのしるしとして門松を立てる。じゃ、注連縄は。それは神様が下りる聖域として注連縄を張るのである。訪れた神に丸い餅を2つ神棚に供えるわけですが、でも、なぜ餅は丸いのかというのを、柳田は全国の資料を集めながら、これは人間の体のなかでいちばん尊いものは心の臓である。これは丸い形をしているのではないか。いまひとつ人間の精神のなかでいちばん尊いのは心である。これもやはり丸い形をしているのではないか。そして、滋養がつくのは餅米である。そして2つの丸い餅を神棚に供えて、心臓と心が生まれ清まっていく。蘇って新たに息吹を神からもらって、そして生成をしていくのだ。それを家の当主から子供たちが、あるいはお嫁さんに行った娘さんたちが、分かち与えてもらって、心を蘇らせ、心をつないでいくために、その年の魂をもらうのだ。それが年玉としてのいわれである。

RTAの総会に頼まれて行ったことがあります。最近の子供は年玉が5千円とか1万円と多い。先生、この額はどのように決めたらいいでしょうか、なんていうばかな質問をされるのですが、そのときに答えるのは、そういうことをいうわけです。

つまり、そういった伝承資料、目に見え、耳に聞こえる、例えば方言とか、昔話とか、伝説。それから祭る人の心の問題、タブーの問題、こういうのをかき集めながら比較研究をして、日本人の精神を、断片的ではあるけれども、中世の時代には、近世には、明治の初めには、戦中期にはという形で歴史的な変化変容を形づくっていかうとしていったのが、柳田国男の民俗学の方法である。

それは私のことばでいえば、柳田国男はその方法として民俗学という方法を編み出したけれども、その方法によって何よりも柳田が願っていたのは、日本の常民史。柳田はふつうの民を「常民」といいましたけれども、日本の民衆の精神史を明らかにしようとしていった。その過去を読み返すことによって、後でお話しますが、「己とはなにか」「日本人とはなにか」「何故に農民は貧なりや」ということを問いただし、国家の主役に国民がなってほしいというための学問を開こうとしていったといえるかと思います。

ついでに、宣伝めいて申し訳ないのですが、いま夏休みに入って、私は岩波のジュニア新書を頼まれて「柳田国男—その民俗的日本人観」というのを書きはじめております。来春には出版されると思いますが、またお読みしていただければわかるかと思います。続いてちくま新書の「丸山真男と柳田国男」というのを書くことになっておりますが、これも先ほどお話したように、架橋的な仕事としてぜひ書き上げなければいかんだろうということで、3年くらいメモをしてきましたけれども、それも春にはまとめて出してみたいと思っております。

2 柳田国男の読書

さて、この2人の「書かれた思想史」と「書かれざる思想史」の思想史家に学びながら、そのなかで一番心ひかれたのは柳田国男の読書であったかと思います。

柳田国男の読書論について、あるいは柳田国男論という論は、この30年の間に150冊ぐらい単行本で出されております。それは皆さんもご存じかと思います。その論者たちが押し並べておっしゃることは、柳田の学問をつくりあげたのは、結局は膨大な「読書」と膨大な「旅」、それを宿業として生涯書かれていったなかから生まれたものであったというふうに言われますし、柳田国男自身も、1957、8年に出された『故郷七十年』という柳田の回想記、自伝がございますけれども、しばしばそんなことを書いております。そのなかに「私は3つの時期に乱読体験をしてきた」ということを繰り返して述べております。

第一の乱読の体験は、柳田は明治8年に兵庫県に生まれておりますが、小学校を終えた11歳のときに、辻川の三木家という大庄屋に、口減らしということもあったかと言われますけれども、父親が懇意にしていた庄屋、そして読書家でもあった三木家に1年預けられます。この三木家には約4万冊の蔵書が所蔵されていた。私も何回か行ったことがあります。その蔵書を、とにかく1年むさぼるように読んだという体験を柳田は書いております。和歌の本とか、経世済民の書物とか、漢書、いまでいえば週刊誌のような絵草紙とか、草紙類の書物もありました。それを毎日二階で読みながら、下から三木家の主人が「坊や、下へ降りておいで」というまで読みふけていたという、いわば第一の乱読時代があった。これが柳田の雑学の学問の風というのを育てていったそうです。

第二の乱読の体験は、長男が東京大学の別科という医学部の速成科を出て、友人の紹介で今日の利根川べりの茨城県利根町布川というところに医院を開業しまして、そこに14歳でありましたけれども身を寄せていました。隣の知人の家に小川家という読書家がおりまして、その本を2年間むさぼるように読んでいったそうです。例えば、戦前に岩波文庫で復刻されましたけれども、赤松宗旦の『利根川図志』の原本を読んで、はじめて「民俗」というもの、「地誌」というものにたいへん深い関心を持っていったそうです。

第三の乱読の体験は、明治43年、36歳のときです。柳田国男は31年に帝国大学を出てから農商務省、法制局、そして内閣記録課長という、いつてみれば図書館長みたいなものですが、その課長を4年間くらい務めております。徳川時代から収集された地方文書（ヂカタモンジョ）や風俗問状、あるいは地方の文献などが集まった膨大な著作を目録をつくって整理をするという仕事を課長としてやったわけです。本好きだったということもあって任命されたそうです。それを読みあさりながら、こんなものを読んでいたら一生かかっても読み切れない。私は、これからは旅に出て、地方の、日本列島の民衆の物言い、物腰、生活や精神の歴史を知っていこうというふうなことを経験したと『故郷七十年』でも書いております。

そういうなかで発見した一つの資料として、菅江真澄という日本の民俗史家のはしりといつていいかと思いますが、特に東北から秋田へわたっ

て、『菅江真澄遊覧記』という、まさに民俗を文字として、スケッチとして書いた初めての民俗史であります、その菅江真澄の何冊かがあって、それを昭和5年以降に『菅江真澄遊覧記』ということで復刻していく作業を一方で進めています。いまは未来社から出版された全12巻で私たちは読むことができますが、たいへん貴重な民俗史でもあったわけです。

ところで、三度にわたる乱読の体験、雑学の体験ではありましたが、柳田のジャンルは、一つは、たいへん雑学である。さまざまな書物を読むという経験。それから日本の本と漢籍、和漢の書もたくさん読んでいます。それから洋書です。英・独・仏の三か国語の原書を丸善から輸入してはいち早く読んで、明治26年から32、3年にわたる島崎藤村や田山花袋などと一緒に『文学界』という雑誌を出して、そこで散文や叙情詩を書くという仕事というか経験をもっておりますが、そういう西欧の精神や文学をいち早く導入して、藤村や田山に教えていったのも柳田国男であったそうです。

その後、文学、農政学、民俗学というふうには読書歴を変えていきますけれども、さまざまなジャンルにわたった古今と西欧を含めた読書家であったという意味で、近代日本における随一の読書家であったということが、しばしば指摘されておりますけれども、なるほどといえるかと思います。

そのなかで、雑本ははずして貴重な柳田の読んだ本、特に古典が多いのですが約2万冊を遺言として残して、これを成城大学に寄贈したわけですが、やがて成城大学に柳田文庫が開設されたわけです。昭和37年8月8日に亡くなったわけですが、遺言の最後に「沖縄の研究のためにこの書物を役立ててほしい」ということを言い残しております。前の沖縄県知事だった太田さんは、2、3年前に岩波新書でそのことを冒頭に書いていて、たしかに沖縄学のはしりは柳田国男である。復帰の動機付けをしたのも柳田国男であった、というふうにいってございましたけれども、なるほどということ、私たちも知らされるわけです。

柳田の宿業としての「読書」と、いまひとつは「旅」です。たしかに柳田は旅人でした。私も全部数えて調べたことがございますけれども、約130回ぐらい日本列島への旅をしております。講演の旅もあるし、官僚としての調査もあり、民俗学者としてのフィールドの旅もあるということで

ございますが、130 数回の旅は、2 日、3 日であることもあるし、3、4 か月の旅であることもありますし、長短さまざまであります、特徴としていえることは、一度も名所古跡の旅をしなかったということです。だから、私の旅は「偏土の旅」であったといい切っております。

そしていまひとつは、同じ所を二度も三度も行くのではなくて、柳田の旅は一回性の旅だったといっております。たしかに京都に講演に行きます。行くときは、いまでいえば新幹線ですが、かつては東海道であった。しかし、帰りは能登のほうを回ってくるとか、和歌山のほうを回って船できたりとか。我々は新幹線で行ってすぐ帰ってきますけれども、そうではなくて一回性の旅でしかなかった。それはことばをかえれば円周の旅でもあったと言われるわけです。できるだけ各地の民衆の生活や歴史を知ろうとして行ったということがいえるかと思います。

そういう旅の経験がありながら、柳田は、ヨーロッパものまねのための遊学の旅というのを経験しておりません。ただ一回、大正 10 年から 12 年、第 1 次大戦が終わったあとの終戦処理のために新渡戸稲造に推挙されて、日本の国の代表として国際連盟の委任統治委員として 2 年間スイスのジュネーブで滞在したことがありました。その当時、ドイツやイタリア、フランス、イギリスに渡って、さまざまな人類学やエスノロジーやフォークロアの書物をあさっては読み、また日本へ送ったということを記録に書いております。

そのことがたいへんなカルチャーショックだったそうです。だから、関東大震災の報を聞いて急遽日本に帰ってきて、これから本格的な学問をしなければいけないということで、あちこちの大学で講演をしたりして論考をまとめたりしています。その格調高い民俗学の理念と方法論をまとめたのが、昭和 2 年に出された『青年と学問』という著書であります。これはぜひ皆さんも読まれると、柳田の歴史観というもの、民衆史を興すことの大切さを、しかもヨーロッパで学んできたカルチャーショックがよくうかがうことができ、私の学問はいままでデレクタントであった、ものずきであった、これではいけないのだと。

大正 14 年に普選法が通ります。そして、世界の悪法と言われた治安維持法も抱き合わせで通りますが、その 1 週間か 2 週間たった大正 14 年 5 月

の終わりに、松本の東筑摩郡の教育会に行って「楽観派の文化史学」という講演をしています。ここで「これからは普通選挙によって世の中を変えていくことなり、そのためには郷土の歴史、日本の歴史を学び、だれがいい人かということをやちゃんと調べなければいけない。でないと、いま以上に盲動になってしまう。いままでは、屋敷神や氏神様に祈祷祈願をして己の飢えや病を越えようとしてきたけれども、これからは政治によって、選挙によって、我々の生活を豊かにしていかなければならない。だから、歴史を知っていくことが大事なのだ」ということを説いているのです。しかし、治安維持法があって弾圧されたために、ほとんどそれは虚しく消されていきましたけれども、その理念は尊かったといえるかと思います。

丸山さんは著作集16巻、そのほか講義録などを含めて岩波書店から出されておりますが、柳田国男は単行本で92冊、ほぼその半分ぐらいが論考編としてあります。筑摩書房での『柳田国男全集』がこの2、3年、新たに編集されて出されておりますが、この38巻のなかに柳田の著作は全部収まります。そのほか文庫やかつての定本もございましたけれども、いま私も編集委員の一人として、あとまだ2、3年かかるかと思いますが、初出から書誌学的にやっておりますけれども、21世紀にとにかく残すことができる日本民俗の精神史の最後の文献として正確に残す仕事をやろうということっておりますけれども、たいへんな読書、旅人のなかから生まれた成果が、柳田の著作集に散りばめられているということができるかと思います。

3 冒険としての読書

さて、きょうのテーマであります「冒険としての読書」ということについて少しお話を進めたいと思います。柳田国男は、しばしば序文の名手であった、あるいは跋文の名手であった、といわれてきました。それから書評・解題・読書雑記などを含めて、著書に対しての評価を厳しく、またちゃんと評価をしているという意味でたいへん評価をされますが、それらをまとめた本が3冊出ているのです。『退読書歴』『老読書歴』『ささやかなる昔』という3冊が全集の7巻と18巻に収められております。私も若い頃

から書評は書評紙などに書いてきましたけれども、とても1冊も2冊も序文や書評なんていうのはまとめることはできません。柳田国男は、さまざまなお弟子さんやジャンルの違う研究者の評価をしたり、推薦をしたりして、育てていったということがいえるかと思います。

柳田が書いたもののなかに「文庫本について」というエッセイがあります。その冒頭に「本を読むといふことは、大抵の場合には冒険である。それだから又冒険の魅力がある」と書いております。さらに続けていえば「教科書や法令のごとく一読を強いらるるものはわずかであるとともに、広告宣伝文以外にその内容の有益を始めから保証してくれる者はなく、実際また各人のいまの境涯に、ちょうど適合するか否かは自分でしかきめられず、読んでみなければ結局はそれも確かでない」。柳田が言わんとしたことは、本を読むことは冒険である。だから魅力がある。つまり、知らない世界を知っていくという喜び、これが読書の醍醐味であるといっておるわけです。そしてまた、なんだこんな本だったのか、という形で無駄を知っていく。そのことも実は冒険もあるのだということを、この後半に述べております。

いまひとつは、これもやはり戦前に書かれた文章ですが、「本が日本にあり余るほど出ていることは、種々なる方面から立証し得られるが、かく申す自分なども、最初には欲しいものの集めきれぬことを嘆き、中頃は選択の標準の示されぬを憾みとし、いまはまた読まねばならぬものの読み尽されぬことを悲しんでいる」。やはり晩年の柳田のことばとしていえば、たくさん本を読んできた、集めてきた。けれども、いまは読みたい本が全部読めない。そういう無念を抱えているということを書いておりますけれども、なるほどというふうに私も思われたわけです。

そんなことから、だから「読書は早くから目的を限定しなければならぬものだ」ともいっています。つまり、柳田の経験からいえば、乱読の体験もそうですが、とにかくあっちこっち分からないので雑学をしてきた。例えば農政学あるいは民俗学を、早く知っていて系統立てて勉強すれば、無駄なくもっと学問をすることができたのにということを、反省として、無念として、柳田はいっておるかと思います。だから、「人生は短くして書物甚だ多し」という考えを晩年に述べているということになろうかと思い

ます。

そのなかで、書物が大事だということはこういうふうにいっております。「書物が唯一の今と過去との交通方法である」と。現代と過去の歴史をつなぐ交通方法である。これはふつうのことばでいっておりますけれども、たいへん深い意味を持った正しい指摘を我々に残していつているなどいえるかと思います。柳田のことばでいえば、歴史意識を養うには本しかないということです。それを預かっているのが図書館であるわけです。

そういう意味で次に図書館に注文をつけております。昭和2年に書かれた「読書懺悔」という懺悔録を柳田が数頁にわたって書いております。こういうことをいっております。「図書館の三つの事業のうち、実際日本に発達したのは二つだけで、一つは少しも顧られていない」。これ、分かりますか。皆さん。どうですか。「何人(ナンビト)も発見蒐集し、保存さえしていれば、それで能事お終われりとする」。たしかに古書でもそうですし、新しい本でもそうですが、とにかくいい本を選書する。そして収集する。そして保存する。この2つは図書館のまさに大きな役割であるわけです。それだけではだめなんだと柳田はいうわけです。「理想的司書でも皆そう思っているが、今日のごとく本の多すぎる時代には、指導が必要である、選択が必要である」といっております。柳田は少年期の体験のなかで、曾祖父が古い読書指導というものをもっていて、まず最初には中国の経義を読む、あるいは皇道の歴史を読む、あるいは格言を読む、というように読書の順序があって、彼のお父さんもそれに従って読んでいったということを書いておりますけれども、柳田は、雑学でやっていったから無駄ばかりしてきたといっております。そういうなかで、図書館の機能というのは、良き選書、収集と保存だけではなくて、指導が必要である、選択が必要である。

そのためにどういうことをしたらいいかというのが、実は昔も今日も大切な図書館の仕事になろうかと思うのです。しかし、残念ながらいまの若い人、つまり学生諸君は本を読まない。図書館にとにかく誘い込まなければいけないということで、私の図書館長時代に、新しく本を書いたさまざまな先生方に、1、2年生の図書館である和泉の図書館に来ていただいて、その閲覧室で、その本を出した著者にお話をさせていただく。学生が300人

とか400人とか集まって話を聞いて感動していくわけです。そして、本を読むという契機をつくってあげるという、実に情けない話ではありますけれども、そういう手を差し伸べながら、図書館に学生たちを誘い込むということをしました。

もう一つは、図書館に検索だけではなくて、すぐ飛び込んで手にとって本が読めるような、100 %開架する図書館を目指さなければいかんということも必要かと思います。もつといえ、皆さんへの宿題として差し上げたいのですが、どういう本がいいか悪いかという、その選択や指導の場合に、各大学で、いま新聞や書評紙がありますけれども、これなどは学生は読みません。ほとんど文学書が多いですが、本の紹介、書評、大学独自のあるいは専門別のテキストクリティークというか、読書の広場みたいなものを、年に4回ぐらいでもいいから出していく。そういう手ほどきも、柳田が「選択とか指導も必要だ」というのですから、ひとつ考えていただきたいというふうに思います。

4 丸山・柳田の共通認識

最後に、丸山真男と柳田国男の共通認識についてお話をして締めくくりにしたいと思います。それぞれ思想史家であり、歴史家でありました。そのことの仕事をもっとも評価した最近の作家として、ノーベル文学賞をもらった大江健三郎さんが、1999年の『群像』の9月号に「本当の開国を始動する」、本当の日本の国をこれから始めていく、ということについて論考を書いておりました。昨年も、私がやっております岩手県遠野市での「遠野物語ゼミナール」という勉強会で、全国から100人ぐらいの受講生が来ますけれども、そこで記念講演をしていただいたのですが、「柳田国男と21世紀」というテーマでした。大江さんは、21世紀の歴史意識や予見力を養うのは、徹頭徹尾実証的な歴史研究と成果を収めた丸山真男と柳田国男しかいない。99%資料に基づいて、実証に基づいて書かれたのは、丸山と柳田の歴史である。そこから予見力をどう出していくかということが、21世紀を占う信頼でき得る歴史であり思想である、ということをお話して下さったけれども、私もそのことは10年、20年前から自覚をし

ながら読み進めてきましたけれども、時代はそっちのほうばかり行きません。しかし、大きな反省に立ったいま、これからそのことをじっくり我々はしなければいけないのではないかと思います。

つまり、「歴史意識の形成」がいちばんお二人とも大事だと。なぜか、バイブルがないからです。書かれたバイブルがないという意味では、歴史意識や歴史認識を繰り返し繰り返し蓄えながら、そしてそこに思いをいたしながら、今日や未来を考えていく。きょうの朝日新聞の論評のなかにも「小泉総理は歴史認識がない」と書いておりましたけれども、たしかにそうだと思うのです。歴史意識を養うという意味では、このお二人の著作、そして読書というものは大事なんだということがいえるかと思います。それは当然「予見力の形成」をしていくということになるわけです。歴史から未来を指すというのは、常に言われてきたことでありますけれども、たしかな予見力を歴史意識のなかで養う。そのたしかなテキストとして丸山真男と柳田国男の著作は、我々にある手応えを残してくれているということを、大江健三郎に教えられながら、私も納得していったわけです。

もう一つは、その歴史意識もさることながら、天下国家のことを考えるだけではなくて、特に柳田学を通していくと、地域の学、自分自身の身の回りのことを教えてくれるわけです。そういう意味で「自己認識の形成」、己とは何かということを教えてくれる学問であるということがいえるかと思います。

いまひとつは、丸山さんも柳田国男も、単なる過去を過去としての学問ではなくて「現代科学としての思想史学」として常にさまざまな著作は発表されていったということ。これは戦中期の柳田国男の『子ども風土記』だとか、『毎日の言葉』とか、あるいは亡くなっていく戦死者に対する鎮魂の書と言われた『先祖の話』とか、それらはすべて時代の時務として書かれた現代科学として過去から未来を見通した書物であったということがいえるかと思います。ぜひ皆さんに読んでいただくといいかと思います。

柳田は『先祖の話』を書きながら、遠い南の地に亡くなっていく兵士たち、学徒たち、その魂というのは、決して靖国に行くのではない。親しい人が眠っている故郷に帰っていくのだ。そういう信仰観を我が民衆は持ってきたのだということを、歴史的に明らかにしていったわけです。戦後そ

れがGHQで削られるのですけれども、そのなかに実は、靖国はつぶして、あれは遊園地にしたほうがいいことをいっているのです。僕もどこかで書きたいと思うのですけれども、そういう卓見をしているのです。

5 むすび

さて、時間もまいりましたので終わりにしたいと思います。むすびとしては、近世江戸時代の歴史家であり、私はあまり好きではありませんけれども、新井白石という歴史家が「学問とは歴史に極まり候」ということをいっております。これはたいへん我々に深い意味をもたらしたことばといえるかと思います。ただ、白石の歴史観というのは、歴史は政治によって、政治家によって区分されて、発展したり後退したりということがあるという政変による歴史観であったわけです。『読史余論』という本が岩波文庫から出ておりますが、そのなかでそういっております。柳田国男はそれに真っ向から反対して書いていますし、戦後、座談会でもいっております。民衆の歴史というのは政変によって変わるものではない。民衆の歴史はつらら文化である。古代から今日まで、つららのようにポタンポタンと、消えていきそうだけど、また残っていく。つまり、尾底骨のように芯は残っていく。不滅なものは残っていくということです。変容していくけれども残っていくのだ。それが民衆の歴史なんだという。そういう意味で新井白石を批判していますけれども、なるほどというふうにも頷かされるわけです。

私の恩師であった橋川文三先生もたいへん雑本読みでありました。毎日のように、大学へ来ると、終わってからは古本屋歩き、余ったお金でお酒を飲んで、また帰るという仕事を20数年、私も連れられてお伴をしましたけれども、そのために先生は命短くして亡くなりましたけれども、生前にしばしばいったことは「後藤君、学問とは本を読むことだよ」と。それは人生の山に登ることと同じなんだ。もう一つは、本を読むことによって謙虚になることだ。さまざまな偉い先人の学問を学び、いつも俺の頭の上にはウェーバーがおり、マルクスもおり、柳田がおり、丸山真男がおるという形で、まさにたくわん石のように重い石を頭に抱えながら生きていく

こと。それが人間の人格というか、味を出していくのだ。だから、学問とは、本を読むことは、謙虚になるためのことでもあるのだというふうに、しばしばいってくれました。たしかにそうかと思います。

私もあと何年生きるか分かりませんが、生涯本を手放さずに、そしてただ本を読んで考えるだけではなくて、そのことを生き方に、行動にうつしていく。陽明学でいうと知行合一に生きたい。それが本を読むことが、生きていくことであるだろう、生かすことでもあるというふうに思ったりして、これから大学でも、あるいは地域の皆さんとも、学生諸君とも、そんなことを話したり、勉強したりしながら生きていきたいなと思っております。

数年前に大分の全国の図書館大会にお邪魔したことがありました。そのスローガンは「21世紀は生涯学習の時代である」でありましたね。その核を担うのは、すぐれた図書館の司書であるというふうにささやかれました。ぜひ皆さんに頑張っていただきたい。21世紀を担っていただきたいということを、皆さんへのメッセージとして、私のささやかなお話を終わらせていただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)